

## 国際理解を目指したダンス授業について

### 2年生の授業について

川井 悦子（保健体育科）

#### はじめに

本校では、1990年より「社会の変化に主体的に対応できる生徒の育成」というテーマで研究を進めてきた。我が国の教育は、著しく普及し、社会の発展と国民生活や文化の向上に寄与してきたという成果の反面、受験教育の過熱や、いじめ、登校拒否、校内暴力、青少年非行などの教育荒廃を生むとともに、創造性、個性の尊重、国際性などの面における種々の問題を内包し、制度の画一性、硬直性による弊害を生じるに至っている。また、その教育が、自ら判断する能力や創造力の伸長が妨げられ、個性のない、同じような型の人間を作りすぎていること、国際化への対応が遅れていることなどの問題点も指摘されてきた。現代の社会では、物質中心主義で心が不在なこと、実証や数量化可能なものの偏重、崇高なものへの畏敬の念の欠如、自然とのふれあいの希薄化、生命を尊重する心の不足、直接体験の機会の減少、価値観の多様化などの傾向が見られてきた。

主体的に対応できる人間とは、変化に振り回されるのではなく、何ものにもこだわらず、何ものにも制約されず、変化を恐れず、絶えず成長する人間ということになる。そのためには、生涯にわたる人間形成の土台ともなる基礎的・基本的な内容の徹底を図るとともに、社会の変化や発展の中で自らが主体的に学ぶ意志、態度、能力を育てていくことが大切である。

今回は、自ら学ぶ目標を定め、主体的に学習できる能力というキーワードに焦点を当て、器械運動の領域を取り上げた。その後、文化と伝統の尊重とともに文化の発展に貢献する、国際社会に生きる日本人としての自覚と責任というキーワードより、ダンスの領域に、研究を進めてきた。

われわれ人類は、大昔から踊ってきた。古事記や日本書紀に書かれている踊りは、現在の神楽の原型であるといわれている。リズムカルに体を動かしながら、何かを表現したり、体を動かす気持ちよさを味わったりする人間の踊りという行為は、古い起源をもちながら、さまざまな変遷をたど

り、現在に受け継がれている。踊りには、リズムよりも物語や風物・人間の心情を表現して、見る人に伝えることに重きを置く踊りと、表現よりもリズムに合わせて体を動かすことに重きを置く踊りとがある。

今、世界中に存在している踊りの種類は、どのくらいあるのでしょうか。数え切れないほどの数があることであろう。日本に在住する外国人の人口が、年々、増加し、いろいろな文化をもつ人々が生活をともにしている。お互いの文化の違いを認め合い、お互いに尊重しあう他文化共生の時代になっている。最近、日本人も、多種多様な踊りを好むようになってきた。ところが、我が国の場合、日本に生まれ育っているながら、我が国の伝統文化、とりわけ民衆が作り出してきた文化については、ほとんど無教養だと言ってよい。そこで、授業の中で日本の踊りを取り上げてみることを考えてみた。

## 研究概略

高等学校ダンス授業で行われているものの大部分は、創作ダンスであろうか。まず、生徒の希望するダンスを、1991年の本校2年生女子授業で、行わせてみた。“It's all the world!”の始まりである。生徒が班ごとに決めたダンスは、いわゆる創作ダンス・バンブーダンス・社交ダンス・ミュージカルであった。その中に、日本の踊りは、全くなかった。しかし、本校の生徒は、以前に行ったアンケート結果によると、日本人が海外で活躍することについては、経済面よりも、文化やボランティア面での活躍を、強く望んでいる。これからの社会では、我々は、活躍するところまではいかなくとも、自国の文化を知り、何か、ひとつでも紹介できることが、大切ではないかと思った。

基礎的・基本的な内容の徹底ということを考えると、模倣から創造へという道筋があがってくる。今までの指導法を考えると、模倣が少なく、ほとんどが創作に費やされていたのではないかと思われる。そこで、ダンス授業で、伝統文化として伝えられてきた日本の踊り 民謡 を、主として取り上げ、模倣をしっかりと行うことにより、自然に、自ら、創作してみたいと思う気持ちが湧いてくることに、重点を置いて考えてみた。この計画を始めようとしていた時、体育館改築の話が持ち上がり、本格的な計画

実施は、1997年、新体育館竣工後からとなってしまった。

まず、2年生女子の授業で、民謡を数種と和太鼓・創作太鼓踊りを用意した。1998年は、それに韓国舞踊のプチェ・チュムを加えた。1999年は、例年の踊りにボディーソックスを加えた。3年生でのダンス選択希望者が多くなり、3年生授業に、ダンスが開講された。3年生は、男女共修の選択制授業で、グループごとに、希望するダンスを実施した。一部、外部講師の導入も企画した。その後、毎年、同じような傾向が続き、現在に至っている。

今回は、その2年生の部分をもとめてみた。

### 研究方法

2年生女子を対象に、6月から9月の間の10～13時間を、ダンス授業に当てた。水泳のため、6月20日から7月31日までは、中断した。6月に、生徒全員にビデオを使用して、用意している踊りを見せ、生徒からの希望も含めて、自分の踊りたいものを決めさせた。また、文化祭で舞台発表をするかどうか、希望をとった。2年目からは、前年度の文化祭舞台発表を見せた。そして、希望調査と活動しやすい人数とを考え、調整をしながら、グループを作った。それぞれの踊りの由来を理解させ、ビデオテープに、練習方法・内容を録画しておき、それを使って練習できるようにした。

また、グループごとに練習計画を立て、練習は授業時間のみで完成するよう指導した。班の希望により、そのうちの一部を創作したり、曲を変えたりしてもよいこととした。最初の3年間は、授業開始前にアンケー

図1 1997年



図2 1998年

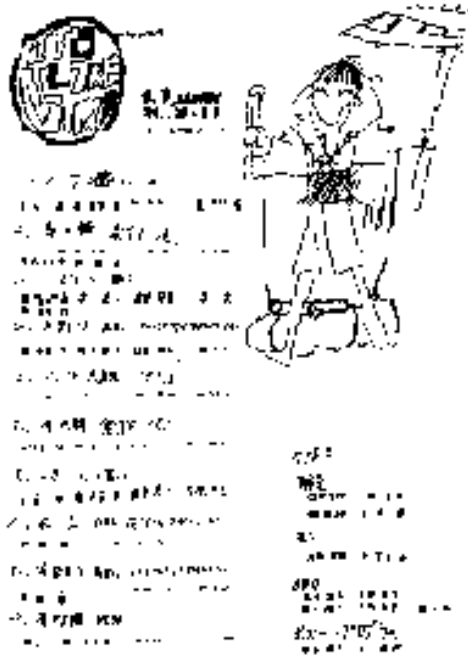


図3 1999年

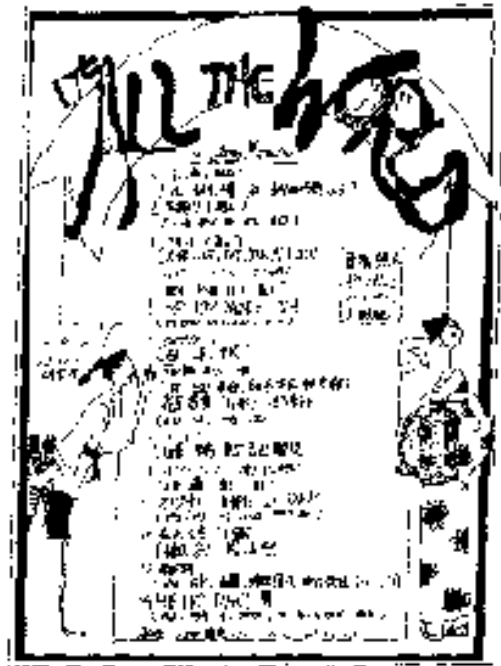
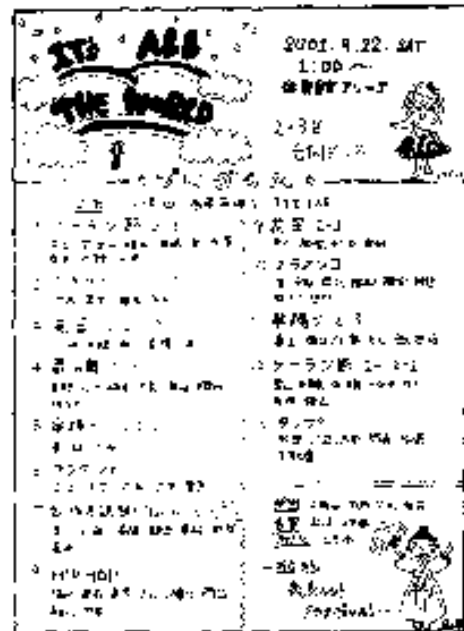


図4 2000年



図5 2001年



トを取り、日本の踊りについての調査をした。授業終了後に、アンケートにより、感想・意見を求めた。

今年、今までの踊りのビデオテープを、アメリカノースカロライナ州のホガードハイスクールとレイニーハイスクールの生徒達に見せ、感想を求めた。最初の時間に、2年生にその感想を読ませ、日本の踊りがどのように受け止められているかを知らせた上で、授業を開始した。

過去5年間の文化祭舞台発表のプログラムが、上記図1～5である。

## 結果と考察

今までに学校で、日本の踊りを踊った経験のある生徒は、表1のようであった。

表1

	なし	1回	2回	3回以上
1997年	74%	17%	2%	7%
1998年	77%	8%	9%	6%
1999年	60%	23%	5%	12%

2年生でダンスの授業がある聞いて、どのように思ったかという点については、表2のようであった。日本の踊りを授業で踊ると聞いて、どのように思

ったかという点については、表3のようであった。

表2

	うれしかった	どちらでもない	少し嫌だった	嫌だった
1997年	26%	45%	22%	7%
1998年	35%	44%	18%	3%

表3

	うれしかった	どちらでもない	少し嫌だった	嫌だった
1997年	28%	59%	10%	3%
1998年	23%	52%	24%	2%

授業で日本の踊りを 表4

踊ってみて、どのように思ったかという点については、表4のようであった。

文化祭で、舞台発表をすることについて、どのように思うかとい

	良かった	どちらでもない	無回答
1999年	95%	2%	3%
2000年	100%	0	0
2001年	100%	0	0

表 5

う点については、表 5 のようであった。3 年生でもダンスを選択したいという生徒が、1998 年頃より多くなり、1999 年よりの開講となった。

	した方がよい	どちらともいえない	いらない
1997年	98%	2%	0
1998年	98%	2%	0
1999年	100%	0	0
2000年	100%	0	0
2001年	96%	4%	0

2 年生ダンス終了時での選択希望者は、表 6 のようであった。

表 6

	選択する	未定	選択しない
1999年	40%	40%	23%
2000年	50%	30%	19%
2001年	62%	22%	16%

授業を終えての全体的な感想として、以下のようなことをあげていた。

- ・ 舞台発表をしなかったが、やればよかったと今思う。
- ・ 1 年間の海外留学経験から考えて、日本の伝統文化を、また一つ習得できて、とてもよかった。
- ・ 観客に「よかったで」と言われて、本当にやってよかったと思った。
- ・ 観客の拍手がうれしかった。
- ・ 来年のことを考えると、興奮してしまう。
- ・ 30 分ジョギングしても筋肉痛にならない私なのに、ソーラン節を踊ったあとは、すごく痛くなり、びっくりした。
- ・ 中学校時代のダンスは、半分、嫌々やっていたが、今年はビデオを見て、考えるのが楽しかった。
- ・ 文化祭にでなかつたので、来年は、衣装を付けてやりたい。
- ・ こんな経験は、もう一生ないと思うので、忘れないようにしたい。
- ・ 希望未提出で、人数の関係から決まっていまい、いやだったが、やっているうちに楽しくなり、本番後はやってよかったと、心から思った。

- ・ 中学の時や応援団のダンスと違って、やってみると楽しかった。
- ・ 舞台発表しないはずだったが、勧められてやって、いい思い出になった。
- ・ ビデオを見て憧れて選んだが、難しかった。でも、舞台のビデオを見て感動した。
- ・ 家で自主練したりして楽しかった。
- ・ ダンスってただ踊るだけではないということがわかった。

ノースカロライナ州のハイスクールの生徒達の感想は、次のようであった。

- ・ 非常に興味がある。
- ・ 太鼓がいい。
- ・ 踊りに教養がある。
- ・ おもしろい。
- ・ 体育授業ではない。
- ・ ドラマの授業内容だ。
- ・ 着物（浴衣）がいい。

2年生で踊った踊りが、卒業後、どのように生かされるかは、興味深いところであった。1997年度卒業生が大学に入学し、夏休みに日本の踊りを、外国人に見せたいという話が持ち上がった。インドネシアとの国際交流で使いたいということであった。その機会を利用して調査した大学生の感想も少しあげておく。

高校時代に、日本の踊りを経験することについて、以下のように述べていた。

- ・ とてもいい経験だと思う。
- ・ 日本の文化を知るいいきっかけだと思う。
- ・ 高校生は、まだ、伝統の良さがあまりわからないだろうと思う。
- ・ 踊りを知っておくことは、日本文化を再確認し、見せることができ  
て良い。
- ・ おもしろい。
- ・ もう少し早くから、経験するのも良いと思う。
- ・ 踊ってみてわかることもあるので、いいことだ。
- ・ 世界が広がるし、教養として良いことだ。
- ・ 若いときにすることが、後に、再び、ふれたいと思う良い機会であり、  
すばらしい。学外で披露するチャンスがあれば、よりアクティブなも  
のになると思う。

本校生は、表1のように、6割以上の者が日本の踊りを踊った経験がな

いということ、表4のように、大部分の生徒が、日本の踊りを踊ってみて良かったと答えていることより、授業として取り上げることは、非常に意味のあることではないかと思われる。

生徒の希望を尊重することは、大切であるが、表2, 表3の結果を見ると、必ずしも、生徒の希望だけで、授業を進めることが、ベストではないということがわかる。

1998年までは、3年生でのダンス希望者は、一講座開講するだけの人数が集まらなかった。しかし、1999年より、年々、希望者が多くなり、男子生徒も毎年、四分の一から五分の一を占めている。これは、授業の中だけに終わらず、文化祭発表をしていることと、関係があると思われる。表5のように、ほとんどの生徒が、文化祭発表をした方がよいと思っており、舞台発表の持つ意味は、非常に大きいと思われる。授業終了後の感想でも、舞台発表をしなかった生徒が『やれば良かった』とか、『来年はやりたい』と言っているので、授業と学校行事とを上手く結びつけることの意義は、大きいと思われる。

アメリカでの感想は、ダンスのクラスとスポーツの歴史のクラスのものである。リズムが全く違うので、非常に興味を持っているようであり、また、踊りの中に、物語性を感じ取っているようであった。本校生は、アメリカの生徒の感想を読んで、日本の踊りに非常に興味を持っていることに驚き、アメリカでのダンス授業への関心が、より一層、強くなったようである。学校でのダンス授業をお互いに見たり、教え合ったりしてみたく思っているようである。今年の2年生は、授業をするにあたり、自分たちの見せたい部分を考えているようであった。授業の前に、アメリカでの感想を知ったことで、生徒達の日本の踊りに対する取り組みが、例年とは、少し変わっていたように思える。生徒がただ、授業で踊るだけでなく、自分達のしていることを外国人に見せ、その反応を知ることによって、学習意欲に大きな違いがでてくるのが、わかったような気がする。

卒業生の感想で、『学外で披露するチャンスがあれば』ということ、アメリカの高校生の日本のダンスについての感想を知ること、本校生の日本の踊りに対する取り組みに変化があったことなどを考えると、今後のダンス授業計画で工夫すべき点は、多分にあると思われる。



## おわりに

ダンス領域での日本の踊りは、ほんの一部であるが、生徒に主体的に取り組ませ、達成感を味わわせるには、まだまだ、考えるべき点は多いと思われる。今回は、2年生についてまとめたが、3年生では、外部講師を招くことによって、選択制という違いはあっても、生徒の意欲の違いを感じている。来年度も、今年以上の希望者がでていようである。その点については、次の機会にまとめたいと思っている。

今後の展望としては、本校生がアメリカでのアートとしてのダンス授業について、非常に知りたがっていることから、インターネットで、お互いやりとりができるようにすることを考えている。

総合的な学習が始まろうとしているが、これは、取り立てて何かをするのではなく、何かをしているうちに、ものを学ぶためのいろいろな分野の学習の必要性を、生徒自ら、感じ取ることが、始まりではないかと思っている。いろいろな分野の学習が、その域にまで達していなかった 発展問題にまで到達していなかった ことを反省し、今後の教材研究にあたるべきだと思っている。生徒が、自ら学び、学びが深まっていくことが、結果として総合的な学習となるのであって、総合的な学習として課題を決めてできるものではないように思っている。

本校は、平成14年度に、公開研究会をもつ予定にしているので、その機会を利用して授業内容の公開ができればと思っている。これからの研究会のあるべき姿も、同時に、考えていきたいと思っている。

## 参考資料

- 1 川井悦子他 大阪教育大学教育学部附属平野中学校・附属高等学校  
平野校舎研究紀要(1990・1991・1992)
- 2 中森孜郎 日本の子供に日本の踊りを (1990)
- 3 本田郁子・薫大和 人はなぜおどるのか:おどりがむすぶ人と心  
(1995)
- 4 久保健 「からだ育て」と「運動文化」 (1997)
- 5 ジェラルド・ジョナス 世界のダンス (2000)